

# パルメニデスのルート

——パルメニデス研究 I (上)——

山 川 偉 也

## I 序 論

断片 I (序歌) V. 28—32 において、無名の啓示の女神は、今しもディケー (Δίκη) の守る門を通過してやってきたばかりの若者 パルメニデスをねぎらった後、次のような言葉を投げかける<sup>(1)</sup>。

……χρεὼ δέ σε πάντα πυθέσθαι  
ἡμὲν ἀληθείης εὐκυκλέος ἀτρεμέσ ἦτορ  
ἡδὲ βροτῶν δόξας, ταῖς οὐκ ἐνί πίστις ἀληθείης.  
ἀλλ' ἔμπης καὶ ταῦτα μαθήσεται, ὡς τα δοκοῦντα  
χρῆν δοκίμως εἶναι διὰ παντὸς πάντα περῶντα.

(……Nun sollst du alles erfahren, sowohl der wohl gerundeten Wahrheit unerschütterlich Herz wie auch der Sterblichen Schein-Meinungen, denen nicht innewohnt wahre Gewißheit. Doch wirst du trotzdem auch dieses kennen lernen und zwar so, wie das *ihnen* Scheinende auf eine probehafte, wahrscheinliche Weise sein müßte, indem es alles ganz und gar durchdringt.)

無名の女神によるこの言葉は、われわれに残されたパルメニデス断片を統一的に理解するうえで、きわめて重要な手がかりを与えられるものであ

る。この言葉は、「真理」と「臆見」についての教説展開の予告をしているのみならず、上掲 Kranz の翻訳に依拠するかぎりには、「死すべきものどもの臆い」(βροτῶν δόξαι) への女神自身による或る種のコミットメントであるとさえ読まれうる。「けれども、にもかかわらず、汝は、このものをも、学び知ることになろう。それも、彼らに現れてあるものが、万物を徹底的に貫き通しながら、どんなふうにもっともらしくもありありそうでもある仕方、存在しなければならぬことになるであろうか、を。」

この Kranz による読みから、「彼らに」を取り去るならば、女神は一種の“degrees of reality”をパルメニデスの体系の中で許容することになるであろう。しかし、テキストには“ihnen”に相当する語は、少なくとも明示的には、ない。G. E. L. Owen は、“Eleatic Questions,” 1960 において、この種のコミットメントを女神自身がしたとこの断片を解釈することに反対する強力な議論を展開した<sup>(2)</sup>。V. 32 *δοκίμως* を“auf eine probehafte, wahrscheinliche Weise”と読むわけにはいかないであろう、と。

にもかかわらず、ここには、パルメニデスの哲学詩の全体的統一的理解のための有力な手がかりが秘められているであろうことは、確かである。

ところでしかし、序歌 V. 22 において初めて登場し、われわれに残されたすべてのパルメニデス断片において、明示的にはついに特定名称でもって同定されることのないこの「女神」(θεά) は、いったい何者なのであろうか。彼女はどこでその歌をうたっているのであろうか。天界の澄みきったアイテルの中で歌っているのであろうか。それとも、冥界の暗闇の中で歌っているのであろうか。あるいはまた、女神の「歌」はあっても、そもそも彼女は初めからどこにも存在しようのない存在であったのであろうか。

序歌は、パルメニデス思想の全体的連関および性格を理解するうえで、基本的に重要なものである；そのような立場を設定するとすれば、序歌に登場するこの女神の本性を同定することは、最重要な課題であるはずである。けだし、パルメニデスの全思想は、この女神の口を通じて、語られるからである。すなわち、パルメニデス思想の荷負い手、主体は、一人称「われ」(ἐγώ) で語るこ

の女神を措いて他にはないのである。

しかるに、この女神がいったい何者であるかを解明する手がかりは、最も直接的には、序歌における若者パルメニデスのルートをたどることなしには与えられない。ところが、従来のパルメニデス研究を概観すると、驚くほどの多様性が見られることになる。しかも、われわれを十分に納得させるに足る議論はみいだされないのである。それはあたかも、パルメニデスの序歌そのものが、意図的隠蔽作用を秘めたシンボリズムによって構成されているかのようなのである<sup>(3)</sup>。

序歌のうちに、パルメニデスの旅程のはっきりとしたルートが表現されているはずであるというのは、あくまでも仮説である。このような仮説に固執して論を立てること自体が、それゆえに、問題とされるかもしれない。

Fränkel は、序歌に表現されているものは、結局、パルメニデスの思惟の歩み、その上昇、「光明への精神突破」(Durchbruch des Geistes zur Klarheit)であって、序歌が含む多様なシンボルが喚起する個々のイメージにこだわり、これにその「固有価値」を与えようとして、本来の意味を没却するなら、「全体は支離滅裂となり、根拠を失うことになる」と言う<sup>(4)</sup>。かくして、Fränkelによれば、序歌に含まれる個々の言葉を手がかりにルートを確定しようとすることは不可能であり無意味である。われわれが洞察しなければならないのは、「後にされるひとつの領域(夜の、感覚的・地上的なふるまいの領域)、旅の目的地(光・太陽・真理の領域)があり、それらの間に」「昼と夜の道を分離する門(Tor das die Pfade von Tag und Nacht scheidet)(強調:筆者)すなわち「認識の門」があって、くりかえしくりかえし同一のこと、闇から光への「上昇」を、パルメニデスがこの序歌において語っているということである、とFränkelは言う。「第一に、太陽の乙女たちをこの上昇に導く力として名前を挙げ指定していることにおいて、次いで、夜の家を立ち去るということにおいて、さらに、乙女たちが頭を蔽っていたヴェールを後に投げ捨てるということにおいて、そして最後に、昼と夜の道を分離する門を通過するということにおいて」。<sup>(5)</sup>

Fränkel のこの発言は、パルメニデスのルートを序歌のうちにみいだそうとする試みが虚しいものであることを示しているであろうか。自身はアレゴリカルな解釈の可能性に異議をさしはさむにもかかわらず、その実アレゴリカルな Fränkel の序歌解釈の構図において、彼がすでに、テキスト解釈からとりだしたところの、パルメニデスのルートについての一定の事実<sup>5</sup>に依拠しているということ、このことにわれわれは注目しなければならない。アレゴリーというものは、その本性上、何物かを土台としての何物かのアレゴリーである。それが土台とするものの十全な同定なくしては、アレゴリーの読解は根拠薄弱なものとならざるをえない。「昼と夜を分離する門」という Fränkel のテキスト解釈ははたして妥当であろうか。「ヘリアデス（太陽の乙女たち）」、「夜の家」、「ヴェール」、「門の通過」は、それらのすべてが、アレゴリカルな解釈以前のテキストの即自的読みのレベルにおける「上昇」（アナバシス）であることを保証するであろうか。この問いに答えようとすることは、とりもなおさず、序歌におけるルートを確定しなければならないということの意味するのである。

しかし、この件（すなわち序歌のうちにパルメニデスのルートが表現されているはずだという仮説を立てるということ）については次のように論ずることもできよう：序歌のうちにはなんらかのルートが表現されているかもしれない。しかし、その解明はパルメニデス思想の本質的理解のために寄与するところはない、と。

Tarán の立場はそのようなものである<sup>6</sup>。彼は、序歌がパルメニデスの現実の経験を伝えるものでもないし、女神による啓示にも現実性はない、と主張する。「序歌の中にはシンボリズムはない。女神はシンボルなしで彼女の教説を説明し、自分の議論をロゴスによって判定せよ、と命ずる」。女神が無名のままであるという事実は、Tarán によれば、この女神がいかなる意味においても、全然宗教的な存在ではなく、彼女の啓示なるものは、パルメニデス自身によってみいだされた真理にすぎないことを意味するのである。序歌は「文学上の工夫」にすぎない。それはフィクションである。「パルメニデスは女神にいかなる実在性をも賦与するわけにはいかなかった。なぜなら、彼にとっては、

ただひとつのもの、唯一で同質な存在だけがある」からである。パルメニデスが自分の教説を韻文で表現したのは、自分の方法の客観性を強調したためであった。そしてそのように決定した以上は、「神的啓示」をくるむ教訓詩の言語および韻律を採用するのが、彼にとっては、自然なことだったのである。

しかし、この Tarán の主張は反駁されうる。Bormann は次のように言う<sup>(7)</sup>：「ホメロス、ヘシオドス、ピンダロス、クセノファネスにとって、神性がなんらの実在性をももたない詩的形姿にすぎなかったといったふうに論ずるのは、たんに粗雑な誤解にすぎない」と。パルメニデスの詩がたんなるフィクションであるなどと主張するのは意味をなさない。そして Tarán が、パルメニデスの教説である有の唯一性から断片 I の女神の実在性を否定的に推論することもまた、問題をあまりにも単純化してしまうものといわなければならない。われわれは「Tarán のと同様の誤謬推理を用いて、人間の非存在をも論証することができる。すなわち：有のみがある、人間は有ではない、ゆえに人間は実在しない、と」。

ところで、Bormann 自身の序歌解釈は、本質的に Fränkel, Deichgräber 流のアレゴリカルなやり方でのそれであった。「要するに序歌で叙述されている旅は、真の道行きを扱っているのでもないし、また天上界やさらには冥界への道行きを扱っているのでもない。イメージのうえからは、地上を超えたものへの馬車行のみが問題とされるけれども、しかし（それを叙述する）個々のイメージはその固有価値を持ちはしない。けれども、たんなるフィクションとしての序歌の解釈も同様に支持しがたいのであるから、残る唯一の可能性は、序歌のうちにシンボリックな叙述を認めることである」。<sup>(8)</sup>

私は、Bormann のこの解釈を拒否する。すなわち、ルートの確定をすることができる、と私は信ずる。しかしまた、私は Tarán の解釈の立場もとらない。私は、パルメニデスが自分のみいだしたところの「真理」を、なんらか「神的啓示」として真剣に受けとったという立場に立つ。このことはしかし、私が Diels,<sup>(9)</sup> Cornford,<sup>(10)</sup> Morrison,<sup>(11)</sup> Guthrie,<sup>(12)</sup> Burkert<sup>(13)</sup> などと同様、シャーマニズム的解釈に加担するということを含意するであろうか。

パルメニデスの旅は「シャーマンの恍惚」の表現であって、その先行者はホメロス、ヘシオドス、オルフィズム、ピュタゴラス主義のうちに、とりわけエピメニデスの名前に関係づけられる黙示文学の中にあるとする Diels 以来、シャーマニスティックな解釈は跡を断たない。Cornford は *Principium Sapientiae* において、パルメニデスの旅を「シャーマンの儀礼的ドラマの中での天界への旅を想起させる」ものだと規定した<sup>(14)</sup>。しかし、もっと若いころの作品である *From Religion to Philosophy* においては、パルメニデスを彼はオルフェウスになぞらえている。「オルフェウスのように、パルメニデスは日の沈む西方の門を通過して、冥界の暗闇のなかへ降りて行く」。<sup>(15)</sup> J. S. Morrison もまた、パルメニデスを、知識の探究のために下界に降りてゆくシャーマンだとしている<sup>(16)</sup>。

W. Burkert は<sup>(17)</sup> そのピュタゴラス研究の中で、パルメニデスにおける神秘的要素を研究し、Diels, Cornford, Morrison と同様に、パルメニデスの旅の中に言われている事柄は、アリストテレス、エピメニデスの事蹟に比較することができる、と言っている。それはとりわけ、南イタリア固有の他界へのシャーマニスティックな死者の旅と比較されえ、ピュタゴラスの伝説の中で語られるカタバシス(下降)に類したものである。パルメニデスに出てくる「光」と「夜」は、生命と死の領域を表現するものであって、パルメニデスの哲学は、こうした神秘的伝統における「不死性の理論」の、思惟の「完全に新たな平面」への移しかえとして成立したものである。「みずから、ギリシア哲学にひとつの新たな時代を導き入れたこの男が自分の出発点としたのは、ピュタゴラス派の科学ないし哲学ではなく、ピュタゴラスの物語やアコースマタがわれわれをそこへ導くところの、『シャーマニスティックな』予言、魂についての尋常ならざる信念、人生のピューリタンのような見方といったものの複合体からであった」。Guthrie<sup>(17)</sup> の見方も基本的には同じことである。「序歌の一般的性格が示すものは、……アイタリデス、アリストテレス、アパリス、エピメニデスおよびヘルモティモスといった、半ばは伝説的な人物によって表わされる初期ギリシア宗教思想における『シャーマニスティックな』流れである」。

われわれは、これらのシャーマニスティックな解釈について何を言うことができるであろうか。ギリシアにおけるシャーマニズムについてわれわれが知るところはそう多くはない。Eliade<sup>(18)</sup> を別にすれば、この問題についての研究は微々たるものである<sup>(19)</sup>。パルメニデスは事実シャーマンであったかもしれない。しかし、なかったかもしれない。現時点でわれわれの言いうることはそれだけである、と私は思う。「シャーマニズム」という言葉を使うことによって多くの解明が期待されるのは、その言葉によって示される事例が研究資料として役立つだけ存在する場合である。パルメニデスの場合がまさにそれであったと言いうるに足るだけ、ギリシアにおけるシャーマニズムの事例が知られているとは思われない。それはむしろ今後の課題であろう。解明されるべき事柄にひとつのレッテルを貼る場合、そのレッテル自身は身元の確かなものでなければならない。しかるに、「シャーマニズム」的解釈なるものは、多分に未解明の概念でもって未解明の事柄を規定しようとしている、と思われる。

私は、テキスト解釈のレベルでは、「シャーマニズム」概念を使用しない。では、私のいう「神的啓示」とは何を意味しうるのか。それは、ヘリコン山においてヘシオドスを襲ったのと同質のものであったと、私は考える。「真実を語ることを知る」<sup>(20)</sup> ムーサの歌は、ヘシオドスにとって真理であった。そしてムーサ自身が真理であった。「アルカイックな人間は」、と U. Hölscher は言う、「内的な力を外的な力として経験するのである」<sup>(21)</sup> と。Fränkel もまた、「アルカイック時代には、言葉と思想、口に出して語られる言葉と対象はひとつであり、そしてとりわけパルメニデスにとってはそうである」<sup>(22)</sup>、と言っている。

パルメニデスにとって、「真理」は、タルスキーの意味論的真理概念とは異なって、実在するもの、体験されうるものであった。それは外的力であり、「神的」なものとして経験されるものであった。そして、神的経験を叙述する言語は、その根底において現実そのものであった。序歌は何かのアレゴリーなのではない。序歌のアレゴリカルな解釈が序歌のアレゴリーなのである。

## Ⅱ 断片Ⅰ解釈

以下の断片Ⅰ解釈において、私は、断片Ⅰを次の五つの部分に分ける。

1. V. 1—5 ἵπποι……ἡγεμόνευον.
2. V. 6—10 ἄξων……καλύπτρας.
3. V. 11—17 ἐνθα……πυλέων ἄπο.
4. V. 17—21 ταὶ δὲ θυρέτρων……ἵππους.
5. V. 22—28 καὶ με θεὰ……διὰ παντὸς πάντα περῶντα.

そして、それぞれの部分について、まず原文を掲げ、テキスト解釈上の問題に触れつつ、一定の結論を出す。

原文資料としては、*Die Fragmente der Vorsokratiker*. Griechisch und deutsch von H. Diels. 11 Auflage, hrsg. v. W. Kranz. Berlin vol. 1., 1964 を用いる。

### 1. V. 1—5

ἵπποι ταὶ με φέρουσιν, ὅσον τ' ἐπὶ θυμὸς ἰκάνοι,  
πέμπου, ἐπεὶ μ' ἐς ὁδὸν βῆσαν πολύφημον ἄγουσαι  
δαίμονες, ἧ' κατὰ πάντ' ἄστη φέρει εἰδότα φῶτα.  
τῆι φερόμην. τῆι γάρ με πολύφραστοι φέρον ἵπποι  
ἄρμα τιταίνουσαι, κοῦραι δ' ὁδὸν ἡγεμόνευον.

第一の問題は ὅσον τ' ἐπὶ θυμὸς ἰκάνοι, にある。そしてこの問題はさらに二つに分れる。ひとつは、θυμὸς について、それが誰の θυμὸς であるかという問題であり、いまひとつは ἰκάνοι についてその希求法の性格は何であるかという問題である。Kranz はこれを “soweit nur die Lust mich ankam” と読んで θυμὸς は「私」つまり詩人パルメニデスのそれであると解した<sup>(23)</sup>。Diels,<sup>(24)</sup> Fränkel,<sup>(25)</sup> Tarán,<sup>(26)</sup> Kirk & Raven,<sup>(27)</sup> Bormann<sup>(28)</sup> 等多くの者も同様であ



る。しかし、Mansfeld<sup>(29)</sup> は、Stein に従い、*θυμός* を「神馬のそれ」と解す。なぜなら、「derjenige der ganz und gar vom göttlichen Geleit, das ihn mit sich führt, abhängig ist, kann nicht gehen „So weit wie seine eigene Lust”」<sup>(30)</sup> だからである。詩人はひたすら運ばれていく存在である (V. 1 *φέρουσιν*, V. 3 *φέρει*, V. 4 *φερόμην; φέρον*)。そこには詩人の主体性の入り込む余地はない、とも考えられる。

次に *ἰκάνοι* の問題。この希求法を Fränkel,<sup>(31)</sup> Tarán は<sup>(32)</sup> 反復的希求法ととる。Tarán にとっては、この希求法表現および V. 8 における *σπερχοίατο* にみられる希求法表現を反復的にとることが、この序歌を「文学的フィクション」と解する重要な根拠となっている。しかし、序歌をパルメニデスの「思惟の歩み」のアレゴリーであるとする Fränkel にとっては、それはまた別の意味をもつ。詩人にとっては、この思惟の歩みの経験は「一度にかぎって起ったことではない。逆に、彼はしばしばこの思惟の道をたどったのであった」。「思惟の過程は、それが新たに反復される以外には語られる術をもたない」のであって、「詩が吟誦されるたびごとに、かくのごとき上昇が起り、かくのごとき啓示が下されるのである」。<sup>(34)</sup>

第二の問題は V. 2 の *πολύφημον* にある。Kranz はこれを *vielberühmten* と訳した<sup>(35)</sup>。「いとも名高い」というくらいであろうか。しかし、果してそう訳せるかという問題である。Fränkel は “mit vieler bedeutsamer Rede”, “Kunde reichen” と取った<sup>(36)</sup>。Verdenius<sup>(37)</sup> (“uttering many things, i. e. bestowing a wide range of knowledge”), Deichgräber<sup>(38)</sup> (“vieles aussage-nd”), Tarán<sup>(39)</sup> (“resounding”), Bormann<sup>(40)</sup> (“mit vieler Kund ausgestattet”) 等も同様の趣旨である。けだし、*φήμη* は、元来は、「名声」ではなく「ニュース」、「知性」、「意味ある語」を意味したからであって、*πολύφημος* は、それゆえに、「多くのことを語る」とか「知識を授ける」とかに近い語であるからだというわけである。Mansfeld<sup>(41)</sup> は、これに対し “ruhmverleihend”, “berühmt machenden” を主張する。Guthrie<sup>(42)</sup> は Pindar, *Isthm.* 8. 64 *θρήνος πολύφημος* の *πολύφημος* が *πολύφατος* (famous) と同じであることを

理由に、どちらの解釈も可、という。

第三の問題は V.3 の *δαίμονες* にある。ところで、断片 I.1—30 の伝承者である Sextus のテキストにおいては、元来この場所にあったのは *δαίμονος* である。Kranz<sup>(43)</sup> による *δαίμονες* の採用は、Wilamowitz,<sup>(44)</sup> Stein<sup>(45)</sup> に従ったものである。では、何故 Wilamowitz は *δαίμονος* を *δαίμονες* に変えたか。もし *δαίμονος* を保存するなら、V.2—3 *μ' ἐς ὁδὸν……δαίμονος* は、馬どもが詩人をダイモンの *πολύφημος ὁδός* へ導き連れて行った、と読まれざるをえない。しかし、馭者なしでどうして馬たちは詩人を道案内することができるのか。

他方、もし *δαίμονες* と読むなら、詩人を導いて行ったのはダイモネス、すなわち女神たち、すなわちヘリアデス（日の乙女子たち）であることになり、V.5 になって初めて登場する *κοῦραι* が最初の行からすでに登場していることになる。けだし、V.2 の未完 *πέμπων* は、Fränkel によれば、現在時制で言われている V.1 の一般的事柄を具体的に現実化するからである<sup>(46)</sup>。

他方、この改変によって別の深刻な困難が生じてくる。すなわち、*δαίμονος* を *δαίμονες* と変えるなら *ἢ…φέρει εἰδότα φῶτα*（道が *εἰδότα φῶτα*（知者、と訳しておく）を運ぶ）という古代ギリシア語としては奇妙な表現が生まれてくる。Bowra<sup>(57)</sup> に拠りつつ、Mansfeld<sup>(48)</sup> は、古代ギリシア語では「ひとつの道がアテネに通じている」とは言えても、「ひとつの道が誰かをアテネに連れて行く」とは言いにくい、と指摘している。

第四の問題は、V.3 の *κατὰ πάντ' ἄσπη* である。これが最も困難な問題である。Kranz<sup>(49)</sup> はこれの訳として、“über alle Wohnstätten hin” を当てている。*κατὰ* を“über…hin” と読んだわけである。

*κατὰ* を“über…hin” と読むこと自体は、もちろん、文法的に誤りではない。しかし、何故、Kranz は、「*πάντ' ἄσπη* へ」とか「*πάντ' ἄσπη* を通って」とかの普通の読み方をしなかったのであろうか。もし、これらの読みをするならば、序歌解釈における深刻な不整合が生じてくる、と考えたからにほかならない。

Kranz は、V. 3 の冒頭の語を *δαίμονες* と読んだ。すると、*πάντ' ἄστυ* (に、  
 を通って、の方へ下って、を打ち越えて) *εἰδότεα φῶτα* を連れて行くものは、  
 必然的に *ἡ ὁδός* とならざるをえなくなる。しかし、その道とはどういう道な  
 のであろうか。この道は文法的に *πολύφημος ὁδός* であらざるをえない。しか  
 し、*πολύφημος ὁδός* とは何か。それは V 22 の *θεά* (女神) の住む *ἡμέτερον δῶ*  
 (われわれの家) へ導くところの道であろう。それはまた、V. 10 の *εἰς φάος*  
 に示されているように、「光の方へ」(*lichtwärts*) の道であろう。そしてまた  
 その道は、V. 27 にみられるように (*ἢ γὰρ ἀπ' ἀνθρώπων ἐκτός πάτου ἐστίν*),  
 「人間どもの歩みする小径の外にある」(*außerhalb von der Menschen Pfade*  
*ist er*) 道であろう。すなわち、それは地上の道ではないであろう。それはま  
 た、V. 5 の *κοῦραι* すなわち V. 9 の *Ἡλιάδες κοῦραι* (日の乙女子たち) が案  
 内して行く (V. 5 *ἡγεμόνευον*) 道なのであるから、天空の道であろう。その同  
 じ道がまた詩人を *πάντ' ἄστυ* (*alle Wohnstätten*) に導く！ *πάντ' ἄστυ* とは何  
 か。それは人間の住居する町々のことではないか。女神のところに導くはずの  
 同一の道が人間界に導く！これはパラドックス以外の何物でもない。

女神が人間界に住んでいるのでないかぎりには、*κατά* を「……へ」、*κατά* を  
 「……を  
 通って」、*κατά* を「……の方へ下って」とは読めない。しかも、女神が人間界に住んで  
 いるというのは不可能な想定である。というのは、女神の家に通ずる道は人間  
 どもの道の外にあるのだから。<sup>(50)</sup>そして、ひとたびそのことが確認されるとす  
 るならば、女神への道は町への道ではありえないのである。しかし、女神への  
 道は町への道ではないということは何を意味するのか。

少し整理をしておこう。「女神への道」を  $\rightarrow \bigcirc$  によって、「町への道」を  
 $\rightarrow \square$  によって、「女神からの道」を  $\bigcirc \rightarrow$  によって、「町からの道」を  $\square \rightarrow$   
 によって表わすことにしよう。すると、可能な場合は、

1.  $\rightarrow \bigcirc = \rightarrow \square$
2.  $\rightarrow \bigcirc \neq \rightarrow \square$
3.  $\bigcirc \rightarrow = \rightarrow \square$

4.  $\bigcirc \longrightarrow \neq \longrightarrow \square$
5.  $\longrightarrow \bigcirc = \square \longrightarrow$
6.  $\longrightarrow \bigcirc \neq \square \longrightarrow$
7.  $\bigcirc \longrightarrow = \square \longrightarrow$
8.  $\bigcirc \longrightarrow \neq \square \longrightarrow$

ということになるであろう。1はただちに不可能である。すると2は可能である。ところで、女神への道は町への道ではないのであるから、7は不可能である。ゆえに8は真である。

さて、Kranzの構想するような序歌の場面へ帰ろう。彼は「女神からの道」、つまり帰り道のようなものは考えなかった。彼は、パルメニデスの旅が女神の啓示の受け入れのためにでかけてゆく旅であると解釈したのである。それゆえ、3、4、7、8のようなものは念頭に置かなかった。しかし、われわれとしては、2を真とするなら、ただちに8も真となることを記憶しておいてよいだろう。ところで、真偽不定で彼が念頭に置いたはずの5、6のうち、彼は5の可能性を否定して6を採った。その理由は、彼がパルメニデスの旅を西方の夜の家から始まると考えたことにある。パルメニデスの旅は、Kranzによれば、西方から東方へ、パエトンとは逆の方向へ、しかしプラトンの『パイドロス』の魂の天外への旅とは異なってコスモスの中を、しかし地上をではなく、人間どもの歩む道を遠く離れたところを、はるかに「打ち越えて」(über…hin)、町々を見下ろしつつ、東方の光の中に住む女神に向って、行なわれる。<sup>(51)</sup>

一読して、その奇妙さに胸打たれる解釈であるにもかかわらず、Kranzのこの解釈は、詩人が女神の道を運ばれて行くということと、その同じ道が詩人を *κατὰ πάντ' ἄστυ φέρει* するということに関するかぎり、整合的なのである。そして、その整合性は、*κατὰ* を „über…hin” と解することによって保たれている。対格支配の *κατὰ* の他の可能なさまざまな訳語 „durch-hin”, „(nahe) an”, „bei”, „in der Gegenstand von”, „entlang”, „gegenüber”, „hinab, hinunter”, „nach Maßgabe”, „im Verhältnis zu” 等のうち、どれひとつとし

て、この場を切り抜けうるものはなかったであろう<sup>(52)</sup>。

しかし、κατά…φέρει は女神の住居からの帰り路を示唆しているのではないのか。それは praesens propheticum ではないのか。

第五の問題は εἰδῶτα φῶτα にある。Kranz はこれを “den wissenden Mann” と訳した。もちろんそれで悪かろうはずがない。しかし、“εἰδῶς φῶς” とはどいう “der wissende Mann” であるのか。εἰδῶς は εἶδω の現在完了形 οἶδα の分詞形である。それは元来、「過去において『見た』もの、その知識をもっている」という意味で使われる形容詞である。φῶς とは ἀνήρ である。つまり、εἰδῶς φῶς とは「見た男」なのである。パルメニデスの文脈では、それは「(真理を) 見た男」ということになろう。なぜ若者パルメニデスは、Kranz の解釈では (また大部分のパルメニデス研究者の解釈では)、女神の啓示を受け取りに行く旅に先立って、すでに「見た男」であるのか。

Diels, Fränkel<sup>(54)</sup> 流の解釈はこうである：パルメニデスは der Wissende である、つまり彼はみずからの旅がはじまるに先だって、その目的を知る者である、と。けだし、パルメニデスは、みずからの θυμός のおもむくかぎりのところへ、馬車によって運ばれていくのだから。パルメニデスの認識意欲と認識力は、旅の終りに得られるであろうものを予期しているのである。

しかし、Mansfeld<sup>(55)</sup> の言うように、それはたんに「見た」ということではない。「見た男」、それは「知る男」という意味での「知者」であるのではない。むしろ、真理を見て悟った男、「覚者」なのである。

このようにして、εἰδῶς φῶς の問題は、κατά πάντ' ἄστυ における κατά を「πάντ' ἄστυ を打ち越えて」と訳すことによって解決されかかった問題を、ふたたび元の混乱へ投げ返してしまうのである。

さて、われわれはここで、V. 1—5 の全体的総括に入ることにする。第一に、V. 1 の ἱκάνοι を反復的希求法と解する必要はない。この件に関しては、U. Hölscher<sup>(56)</sup> の “eventual, nicht iterativ” という判断が適切である。彼はまたここに類出する未完了過去形 V. 2 πέμπον, V. 4 φερόμεν, V. 4 φέρον, V. 5 ἡγεμόνευον についても “auch die imperfektischen Formen, in denen am Anfang

die Fahrt geschildert wird, bezeichnen nicht Wiederholung des Vorgangs, sondern das Zuständliche der einmal erlebten Fahrt.” と言って、Fränkel, Tarán の読みを却下する。第二に、私は V. 3 における Kranz による *δαίμονες* を却下する。すなわち伝統的読みに戻す。Kranz の読みは、それに続く *ἦ… εἰδότες φῶτα* の主語を道 (*ὁδός*) にしてしまうからである。すると、*δαίμονος* の採用によって、*ἦ… εἰδότες φῶτα* の主語は「女神」(*ἡ δαίμων*) と読まれうる。私は、*δαίμων* を男性 (*ὁ δαίμων*) とはならない。序歌のうちには明示的には男神は現れてこないからである。すると、この女神は必然的に V. 22 における *θεά* となる。第三に、私は V. 3 の *ἐπέε* を、たんに「…したとき」ととらないで、「……した後」と解す<sup>(57)</sup>。このことによって、V. 2 *πέμπων* と同じ V. 2 の *βῆσαν* との時間の前後関係が明瞭になる。すなわち、*πέμπειν* の運動が始まる前に *βαίνειν* の運動は終わっている。第四に V. 1 の *θυμός* の主語をこの詩の冒頭の *ἔπποι* とするか詩人とするかについては今のところ態度を保留する。第五に V. 3 *εἰδότες φῶτα* を、たんに「知者」ではなく「見た男」すなわち「覚者」と訳す。第六は V. 4 に二度現れる *τῆι* を V. 2 の *πολύφημος ὁδός* および V. 5 の *ὁδὸν* と同一視する。すると、第三に認めたことにより、その道はまた *πολύφημος ὁδὸς δαίμονος* である。

さて、以上によって、残された問題は、V. 1 の *θυμός*, V. 2 の *πολύφημος* および V. 3 の *κατὰ παντ' ἄσθη φέρει* となる。これら残された問題が何を含意するかを少し整理しておこう。次の表は、V. 1—5 に現れる重要な動詞に関して、その主語、その目的語（誰を、また、何を）、そのめざす方向（目的地）、その運動が経過する道、を対応させることにより、テキストの読みに関する不明確さがどの程度残されているかを概観するためのものである。

	主 語	誰(何)を	方向(目的地)	道	
1	V. 1 φέρουσιν	ἵπποι	με	1 ἡμέτερον δῶ 2 πάντ' ἄστη	(ὁδὸς δαίμονος)
2	V. 1 ἰκάνοι	θυμὸς { ἵππου 1 { μου 2		1(ἡμέτερον δῶ) 2(πάντ' ἄστη)	
3	V. 2 πέμπον	ἵπποι	με	ὅσον τ' ἐπὶ θυμὸς ἰκάνοι	(ὁδὸς δαίμονος)
4	V. 2 βῆσαν	ἵπποι	με	ἐς ὁδὸν πολύφημον	(ὁδὸς δαίμονος)
5	V. 3 κατὰ …φέρει	δαίμων	εἰδότεα φῶτα	1 πάντ' ἄστη 2 ἡμέτερον δῶ	(ὁδὸς δαίμονος)
6	V. 4 φερόμην	ἐγώ		1 ἡμέτερον δῶ 2 πάντ' ἄστη	ὁδὸς δαίμονος
7	V. 4 φέρον	ἵπποι	με	1 ἡμέτερον δῶ 2 πάντ' ἄστη	ὁδὸς δαίμονος
8	V. 5 ἡγεμόνευον	κοῦραι	ὁδὸν		ὁδὸς δαίμονος

上の表において、ひとつのコマに二つの語が現れている箇所は両義的であり、それゆえに、そうした箇所を含む行は両義的である。( )内は動詞の弱い含意を示す。表において二つの語が現れるコマをもたない行は3, 4, 8である。しかし、3は「方向」の欄に2の「主語」の欄における未決着の *θυμὸς* を含むゆえに両義的である。さて、この *θυμὸς* に関する両義性を除けば、他は *πάντ' ἄστη* と *ἡμέτερον δῶ* にかかわる両義性である。この点について少し説明を加えておきたい。その説明の便宜上、5の *κατὰ…φέρει* をとってみる。

5. *δαίμων* が *εἰδότεα φῶτα* を……運ぶ。

この文は、不完全である。どこへ・どの道を通して運ぶのかが明確でない。ところで、主語 *δαίμων* は V. 22 の「女神」と同定され、目的語 *εἰδότεα φῶτα* は「真理を見た者」としての「覚者」だと同定された。そして *κατὰ πάντ' ἄστη* は「すべての町へ」とも「すべての町を打ち越えて」とも訳されうることが示

された。このことにより、5は、それぞれ

5・1 女神が覚者をすべての町へと運ぶ。

5・2 女神が覚者をすべての町を打ち越えて運ぶ。

という二つの文に分れることになるだろう。V. 2—3の *ἐπεὶ…εἰδότες φῶτα* の原文に即してこれらを訳し分ければ

1. すべての町に覚者を運ぶ女神、その女神の *πολύφημος* な道に、馬どもは私を導き連れて行った後
2. すべての町を打ち越えて覚者を運ぶ女神の道、その *πολύφημος* な道に、馬どもは私を導き連れて行った後

ということになるであろう。「…行った後」「私」はどこへ行くのか。2の場合はおそらく女神の住居である *ἡμέτερον δῶ* (V. 25) へ行くのであろう。しかし、その場合、なぜ「私」が「覚者」と呼ばれるのかが分らない。1の場合、「私」は町へ行くのか、女神の住居に行くのかがそもそも分らない。その指標となるものがないからである。しかし、町へ行くことが女神の啓示を受けて詩人である「私」が女神のところから人間界に帰ることを意味するとするならば、「私」が「覚者」と呼ばれるゆえんは明らかになる。いずれにしても、5そのものは両義的である。

5が両義的であるのに応じて、他のものも両義的である。

5の両義性を解消するために、私は Mansfeld の議論を援用したい、と思う。すなわち、私は、Mansfeld<sup>(58)</sup> と同様に、V. 1—3を次のように読解する。

V. 1—2 : *ἐπιοὶ…πέμπον* パルメニデスは旅の途上にある。その旅は女神の道の上でなされる。

V. 2—3 : *ἐπεὶ…δαίμονος* パルメニデスが女神の道にどのようにして至ったかを告げる。



V. 3 : ἤ·…εἰδότεα φῶτα パルメニデスが啓示を得ての帰路の予告。

「パルメニデスがこの知識を」と、Mansfeld は Fränkel を批判しつつ言っている、「旅立つまさにそのときに持っていたと信ずる必要はない」と。彼はすでに知者である者として女神の所に行ったのではない。女神への途行きの途上においては、彼は未だ知者ではない。そうではなくて、女神の所から世界へ出発しようとするとき、世界との関係において知者なのである。「パルメニデスがすべての町へと行くまさにそのとき持っている認識、すなわち、彼が認識への道に着くまさにそのときにはなお獲得しなければならないものである認識とは、パルメニデスの哲学である。この認識とともに彼を女神はすべての町へと連れて行くのである」と。

こうして、女神の道とは、「女神への道」であるばかりではなく、「女神からの道」でもある。女神の道は、旅立つパルメニデスにとっては「知識を授かる」道であろうが、真理を見た者、「覚者」として人間世界に帰り行くパルメニデスにとっては「誉れ高い」道なのである。そして、往きの道においてはただ運ばれてゆくだけの存在であったパルメニデスを連れて行った馬が、還りの道においても付き随うと想定してよいであろう。けだし、それは同じひとつの女神の道なのであるから。

このようにして、残された問題は解決した。人間世界に還って行くパルメニデスに冠せられる形容詞として見るとき、*πολύφημος* は「誉れを授ける・誉れ高い」と訳されてよいものであり、往きの主導権を握る者が *ἔπποι* であるかぎりには、*θυμός* は *ἔπποι* の *θυμός* なのである。

最後に、V. 1—5 の訳を付しておく。パルメニデスの原文六脚韻律詩を想記させるように、擬古文にしてみる。

われをしも 運びゆく駒	1
こころとどかふ かぎりまで	1
遣りぬ かの 誉れを授け	2
覚者をば (人の住むなる)	3

なべての町に 還すてふ 女神の道に	3—2
われを導き 往かしめし後	2
その道をこそ われは <sup>ゆ</sup> 駕きけり	4
車牽く 多識の馬ぞ われを乗せ	4—5
乙女子ら 道を拓きて 示してければ	5

2. V. 6—10

ἄξιον δ' ἐν χυλόησιν ἴει σύριγγος αὐτήν  
 αἰθόμενος· δοιοῖς γὰρ ἐπέεγγο δινωτοῖσιν  
 κύκλοις ἀμφοτέρωθεν· ὅτε σπερχοίατο πέμπειν  
 Ἕλιάδες κοῦραι, προλιποῦσαι δώματα νυκτός,  
 εἰς φάος, ὠσάμεναι κράτων ἄπο χερσὶ καλύπτρας.

V. 7 : αἰθόμενος; V. 8 ὅτε σπερχοίατο πέμπειν; V. 9 : προλιποῦσαι; V. 9 : δώματα νυκτός が解決されなければならない問題である。

V. 7 : αἰθόμενος これは、たんに「熱せられて」、 「熱くなって」ということではない。ホメロスでは、αἰθομαι はつねに分詞形で現れ、「燃えさかる」、「燃えわたる」、「赤々と炎をあげる」(Il. 6. 182; 8. 563; 13. 320; Od. 7. 101 etc) という意味で使われる。すなわち、車軸が軸受けの中で、回転する轍のすさまじいスピードのため、熱せられ、炎を吹き出し燃えているのである。その赤々として明るく輝やくさまが見られる。すなわち、馬を御するヘーリアデス・クラーイ(日の乙女子たち)は、「暗闇」の中を「光の方へと」(εἰς φάος V. 10) 疾走しているのである。すなわち、それは「上方」に向っての運動である。

この「上昇」については、しかし、次のような問題がある：日の乙女子たちは、その「光の方への」疾走において、詩人パルメニデスをすでに伴っていたのかどうか。これはすなわち、

ὄτε σπερροχόατο πέμπειν

Ἡλιάδες κοῦραί, προλιποῦσαι δώματα νυκτός,

εἰς φάος,

をどう解釈するかという問題である。

Diels<sup>(69)</sup>によれば, *κοῦραι* は詩人を光へと, 光の方向へと導くべく急ぐ。すなわち, 彼女たちは, 詩人といっしょに夜の家 (*δῶματα νυκτός*) を後にしたのである。アレゴリカルな解釈の立場に立つ Diels にあっては, その際, 「*φάος*」とは「光の国 (Reich des Licht) であり, 「夜の家」とは「夜の国」 (Reich der Nacht) のことである。Fränkel<sup>(70)</sup>にとっても, すでに見たように, 「光へ」とは「光・太陽・真理の国」を意味し, 「夜の家」とは「感覚的・地上的な領域」を意味する。それらは, 現実には場所を規定することのできない領域である。要するに, 「上昇」が起り, その上昇において詩人は乙女子たちによって伴われたのだということを, アレゴリカルに, 認識の旅・思惟の旅という関連において把握すればよいのである。「上昇」といっても, それは「どこからどこへの」上昇であるかといった問いには答えられない, また答える必要のない, 精神の上昇なのである。(1)日の乙女子, (2)「夜の家」を後にすること, (3)ヴェールを後に投げすてること, (4)門を通過すること, これらはみな精神の上昇のアレゴリーなのであって, その一々の表現が一体となって造りだすシンボリックの意味の統一性を把握すればよいのである。そして, この上昇は精神の上昇なのであるから, パルメニデスがこの上昇において行をともしたか否かといった問いは, そもそも意味をなさない問いなのである。

しかし, パルメニデスの序歌のうちに, その旅のルートを確認することができなければならないとするわれわれの立場からすれば, この「上昇」において詩人がすでに伴われていたかどうかと問うことは意味のあることであり, はっきりとした答を要求するものなのである。

Bowra<sup>(61)</sup>は, この箇所 (V.6—10) において, 詩人パルメニデスへの言及がなされていないことに注目した。詩人を導くために出かけて行く前に, すで

に日の乙女子たちは「夜の家」を後にしている (*προλιποῦσαι* : アオリスト) のである。

Vos<sup>(62)</sup> は、詩人の旅と日の乙女子たちとがつねに同時に同じ行程をとる、とわれわれに確信させるものは何もない、と主張した。彼は、パルメニデスと日の乙女子たちとが旅をはじめる出発点は異なっており、前者は地上から、後者は地中にある「夜の家」から出発した、そして、彼らは地上において出会い、上方への旅をともにする、と主張した。

Mansfeld<sup>(63)</sup> は、前記兩名の意見を参照しつつ、テキストの読みに関して次のように言う。すなわち、9行目 *δῶματα νυκτός* の次に来るコンマを抹消し、*εἰς φάος* を *πέμπειν* にかけて読まずに *προλιποῦσαι* にかけて読む (Vos の読み)。すなわち、Diels のように「彼女たちは (私を) 光の方へ伴ない随れて行かむと急いだ」と言うふうに読まないで、「『夜の家』を後にして (そして) 光の方へ(行った)」 („die das Haus der Nacht verlassen hatten (und) zum Licht (gegangen waren)”) と読む。そして、*λείπειν* のうちに „gegangen waren” が含蓄されることを文法的に説明した後で、「アオリストに結びつけられた、‘Gehen’ の概念のこの省略は、この運動が突如として生ずるのだということを示唆する。運動の突然性こそ ‘Gehen’ という概念の省略を可能にするのである。つまり、両運動はひとつ、なのである。——序歌においてわれわれが有するものがまさにこれである。突如、ヘリアデスは『夜の家』を後にし光に向けて出発したのである。……光の方への運動は、同伴が始まる前に始まった、そしてその運動はまずもってヘリアデスみずからの運動なのである。……したがって、二つの運動があることになる。(1)馬たちが地上から詩人を連れてき、彼を女神の道にもたらず。(2)ヘリアデスたちが「夜の家」を後にし、詩人に同伴するより前に、光の方へと出発する。これらの運動は、一方では詩人と馬車が居り、他方ではヘリアデスが居て、彼らが互いに出会い、そこで詩人はさらに日の乙女子たちによって導かれて行くといったふうに生ずるのである」と言う。

テキストの文法的読みに関しては、「光の方へ」(*εἰς φάος*) を *σπερχόιατο πέμπειν* の方へかけようが、*προλιποῦσαι δῶματα νυκτός* の方へかけようが、運動

に二段階があることには異論あるまい。そして、その時間的前後関係は、1) *προλιποῦσαι δώματα νυκτός* 2) *σπερχοίατο πέμπειν* というようになるだろう。また、日の乙女子たちが「夜の家」を後にして、*σπερχοίατο πέμπειν* したとき、そのときに、日の乙女子たちが詩人といっしょにいなかったということ、すなわち、われわれがいま問題にしている V. 6—10 において詩人が不在であるということについても、私は Mansfeld と意見を同じくする。V. 8 *ὅτε σπερχοίατο πέμπειν* *Ἡλιάδες κοῦραι* において、*σπερχοίατο πέμπειν* は、Homer. *Il.* XIX. 317—8 における *ὁπότε σπερχοίατ' Ἀχαιοὶ Τρωσὶν ἔφ' ἱπποδάμοισι φέρειν πολύδακρυον Ἄρηα* (アカイア人たちが馬を手馴らすトロイア人たちに涙に充ちた戦いを仕掛けてやろうと急いだ折には) のように、「送ってやろうと急いだ」のであって、誰かを送りつつその「送り」を急いだのではない。アカイア人たちが戦さを仕掛けようとして急いだとき、戦さはまだ始まってはいないのである。

(これに関連して、V. 8 のこの箇所での *ὅτε*+希求法を、Fränkel, Tarán の主張のように、「反復的希求法」ととる必要はない。これについては、たとえば、Homer, *Od.* XIX. 336—340 などを参考にできる)<sup>(64)</sup>。*σπερχοίατο πέμπειν* には、(今は行をともしてはいないが、その人と行をともしるべく出会い、) 同伴しようとして急いだ、ということが含意されている。すなわち、詩人はこのシーンには含まれていないのである。しかし、「一方では詩人と馬車が居り、他方ではヘリアデスが居る」という Mansfeld の発言についてはどうか。明らかに、われわれが問題にしている V. 6—10 において、日の乙女子たちは、馬車によって「夜の家」を発し、その同じ馬車によって、詩人に会い彼を送るべく、急いでいる。他方でしかし、Mansfeld によれば、すでに詩人は馬車によって旅をしている。二台の馬車！ しかもそれら二台の馬車を牽くところの馬ども(すくなくとも三頭の馬が合計して居ることになるであろう。というのは、パルメニデスを乗せて走る V. 1 の馬は複数の馬 (*ἵπποι*) であり、乙女子たちが V. 6—10 において御する馬車を牽く馬の頭数は不明であるから)はすべて神馬である。というのは、V. 1 の *ἵπποι* はその *θυμός* のままに道を知りパルメニデスを導く馬であるから神馬であり、日の乙女子たちの馬も当然神馬で

なければならぬからである<sup>(65)</sup>。

Mansfeld の解釈は、はなはだ複雑なものだと言わなければならない。実のところ、彼の考えるパルメニデスのルートはきわめて奇妙なものなのである。彼は、ヘシオドスの『神々の系譜』758 に出てくる「夜の家」を当然想起させてよい序歌 V.9 の *δώματα νυκτός* を、はるか西方の天空高いところ、しかもコスモスの外にあると想定する。そのコスモスはキュクロプスの城壁のような頑丈な壁によってとり囲まれており、そこにひとつの門（『イリアス』5.750 からそのヒントを得ている）があり、その門番としてディケー女神が居る（ホメロスではホーライがその門を守っている。しかし、ヘシオドスの *Th.* 900 によればディケーはホーライのうちのひとりである）。Mansfeld の構想したような序歌解釈においては、ヘリアデスはこの天外にある「夜の家」を発し、天外の超越的世界をコスモスの内部世界と分離するこの門を通してパルメニデスを迎へに行くのである。他方、パルメニデスは、自分自身馬車に乗って地上を旅しており、日の乙女子は彼をみつけ、こうして彼らはともに、ふたたびディケーの守る門を通して啓示の女神の住む住居へと至り着くのである<sup>(66)</sup>。

この奇妙な(?) 解釈において、Mansfeld は、パルメニデスのルートの時間の前後関係をどのように捉えたのか。少し整理しておく。（以下、T は時間、数字は時の前後関係を示す）

V. 1 — 3 において、Mansfeld は、

T<sub>1</sub> *Ἴπποι μ' ἐς ὄδον (ὄδος δαίμονος) βῆσαν. (V. 2)*

T<sub>2</sub> *τῆι (=ὄδος δαίμονος) ἵπποι με πέμπουν. (V. 1 — 2)*

T<sub>3</sub> *θεά με κατὰ πάντ' ἄστυ φέρει. (V. 3)*

を認めた。1) パルメニデス、女神の道に着く。2) パルメニデス、女神の道に行く。3) 女神がパルメニデスを人間界に帰す、の順である。そして V. 6 — 10 において彼は、

T<sub>1</sub>' *κοῦραι προύλιπον δώματα νυκτός. (V. 9)*

T<sub>2</sub>' *Ἡλιάδες κοῦραι σπερχοίατο πέμπειν. (V. 8)*

を確認した。T<sub>1</sub>、T<sub>2</sub>、T<sub>3</sub> との関係において T<sub>1</sub>'、T<sub>2</sub>' はどのようになるか。

あいまいなままである。

それに対し、私の解釈ではV.1—5における  $\tau\eta\iota$  (=  $\delta\delta\delta\varsigma$   $\delta\alpha\iota\mu\omicron\nu\omicron\varsigma$ )  $\acute{\epsilon}\pi\pi\omicron\iota$   $\mu\epsilon$   $\pi\acute{\epsilon}\mu\pi\omicron\nu$ . (V.1—2),  $\tau\eta\iota$  (=  $\delta\delta\delta\varsigma$   $\delta\alpha\iota\mu\omicron\nu\omicron\varsigma$ )  $\varphi\epsilon\rho\acute{o}\mu\eta\nu$ . (V.4),  $\tau\eta\iota$  (=  $\delta\delta\delta\varsigma$   $\delta\alpha\iota\mu\omicron\nu\omicron\varsigma$ )  $\mu\epsilon$   $\varphi\acute{\epsilon}\rho\omicron\nu$   $\acute{\epsilon}\pi\pi\omicron\iota$ . (V.4),  $\kappa\omicron\upsilon\rho\alpha\iota$   $\delta'$   $\delta\delta\delta\nu$   $\acute{\eta}\gamma\epsilon\mu\acute{o}\nu\epsilon\upsilon\omicron\nu$ . (V.5) は同じ時間経過のうちにあると考えるから、

T<sub>1</sub>  $\acute{\epsilon}\pi\pi\omicron\iota$   $\mu'$   $\acute{\epsilon}\varsigma$   $\delta\delta\delta\nu$  (=  $\delta\delta\delta\varsigma$   $\delta\alpha\iota\mu\omicron\nu\omicron\varsigma$ )  $\beta\eta\sigma\alpha\nu$ . (V.2)

T<sub>2</sub>  $\tau\eta\iota$  (=  $\delta\delta\delta\varsigma$   $\delta\alpha\iota\mu\omicron\nu\omicron\varsigma$ )  $\acute{\epsilon}\pi\pi\omicron\iota$   $\mu\epsilon$   $\pi\acute{\epsilon}\mu\pi\omicron\nu$ . (V.1—2)

T<sub>2</sub>  $\tau\eta\iota$  (=  $\delta.\delta.$ )  $\varphi\epsilon\rho\acute{o}\mu\eta\nu$ . (V.4)

T<sub>2</sub>  $\tau\eta\iota$  (=  $\delta.\delta.$ )  $\mu\epsilon$   $\varphi\acute{\epsilon}\rho\omicron\nu$   $\acute{\epsilon}\pi\pi\omicron\iota$ . (V.4)

T<sub>2</sub>  $\kappa\omicron\upsilon\rho\alpha\iota$   $\delta'$   $\delta\delta\delta\nu$   $\acute{\eta}\gamma\epsilon\mu\acute{o}\nu\epsilon\upsilon\omicron\nu$ . (V.5)

T<sub>3</sub>  $\theta\acute{\epsilon}\alpha$   $\mu\epsilon$   $\acute{\upsilon}\pi\epsilon\delta\acute{\epsilon}\xi\alpha\tau\omicron$ . (V.22)

T<sub>2</sub>  $\theta\acute{\epsilon}\alpha$   $\mu\epsilon$   $\kappa\alpha\pi\grave{\alpha}$   $\pi\acute{\alpha}\nu\tau'$   $\acute{\alpha}\sigma\tau\eta$   $\varphi\acute{\epsilon}\rho\epsilon\iota$ . (V.3)

となり、また、V.6—10については、Mansfeldと同様に、日の乙女子たちが夜の家を発することが、詩人を送ろうと急ぐことに時間的に先立つことを確認したから、

T<sub>1</sub>'  $\kappa\omicron\upsilon\rho\alpha\iota$   $\pi\rho\acute{o}\upsilon\lambda\iota\pi\omicron\nu$   $\delta\acute{\omega}\mu\alpha\tau\alpha$   $\nu\upsilon\kappa\tau\acute{o}\varsigma$  (V.9)

T<sub>2</sub>'  $\acute{\eta}\lambda\acute{\iota}\acute{\alpha}\delta\epsilon\varsigma$   $\kappa\omicron\upsilon\rho\alpha\iota$   $\sigma\pi\epsilon\rho\chi\omicron\iota\acute{\alpha}\tau\omicron$   $\pi\acute{\epsilon}\mu\pi\epsilon\iota\nu$ . (V.8)

である。さて、T<sub>2</sub> (V.1—2) を他の T<sub>2</sub> と同じ時間経過の中にあると認めることは、Mansfeld が主張するような「二つの馬車」を排除する結果を生ずる。すなわち、そのような二つの馬車は存在せず、ただひとつの馬車だけが存在するという結果を生む。そのことを次に確認する。

I T<sub>2</sub> (V.1) において「私」を運ぶ馬 = T<sub>1</sub> (V.2) において「私」を女神の道に導く馬

II T<sub>2</sub> (V.1) における馬 = T<sub>2</sub> (V.5) における乙女子たちの御する馬

III T<sub>2</sub> (V.5) における乙女子たち = T<sub>2</sub>' (V.8) における日の乙女子たち  
ゆえに、

IV T<sub>1</sub> (V.2) における「私」を女神の道に導く馬 = T<sub>2</sub>' (V.8) における

日の乙女子たちの御する馬

ゆえに、

V  $T_1(V.2)$  に日の乙女子たちは「私」とともに居る。

しかるに、

VI 「私」を送ろうと「夜の家」を発し ( $T_1'(V.9)$ ), 急ぐ ( $T_2'(V.8)$ )  
段階で、「私」は日の乙女子たちと (未だ) 行をともにしていない。

ゆえに、

VII  $T_1', T_2'$  は  $T_1$  に先立つ。

私の結論VIIは、V. 1—10の時間関係を次のように復原させる。(→は時間の進行方向を示す)

$$(1) \quad (2) \quad (3) \\ (T_1' \rightarrow T_2') \rightarrow (T_1 \rightarrow T_2) \rightarrow (T_3 \rightarrow T_4)$$

(1)は日の乙女子たちが「私」を「迎え」にゆくまでの乙女子たちと馬どもだけの行動、(2)は「私」を加えた全チームの行動、(3)は女神のところに居る間の「私」の行動に予期される帰路における「私」の行動を加えたものである。

時間関係はかなりの明らかとなった。次に場所の規定を行なってみたい。日の乙女子たちが発した「夜の家」はどこにあるのか。詩人パルメニデスが発した地点はどこであり、めぎす女神の住居はどこにあるのか。

さて、私はこの段階において、パルメニデスの構想した宇宙の構造をヘシオドスの『神々の系譜』との関係において解明しようとした M. E. Pellikaan-Engel の注目すべき書物、*Hesiod and Parmenides. A new view on the cosmologies and on Parmenides proem*, Amsterdam, 1978 を大幅に利用することにする。この書物において Pellikaan-Engel は、パルメニデスのルートについて、私見によれば、従来のどの論者よりも真相に近いと思われる議論を行なっている。すなわち、パルメニデスの旅は、P.-E. (Pellikaan-Engel) によれば、アナバシスではなくカタバシス (下降) なのである。



P.-E. は、パルメニデスの序歌全体とヘシオドスの『神々の系譜』736—766の間にきわめて緊密でパラレルな対応関係が成り立っていることを、両者間の文体・語彙・観念上の比較研究によって明らかにしようとした。その研究結果によれば、われわれがいま問題にしようとしている *δῶματα νυκτός* は、「昼」と「夜」とがそこを住居とするヘシオドスの「夜の家」に対応するものなのである。そして、ヘシオドスの「夜の家」は、地下にある。

しかし、パルメニデスの「夜の家」とヘシオドスのそれは、正確に言ってどのような対応関係にあるのか。それを論ずるためには、V. 11—17 に出てくる「昼」と「夜」について、またディケーの守る「門」について論じなければならない。それゆえ、われわれはパルメニデスの旅におけるルートの場所規定を V.11—17の解釈中において集中的に行なうことにする。

V. 6—10の訳

車軸は鳴りぬ 軸受けに	6
炎と化りて 牧笛の音をば発しつ。	7—6
けだし そは 廻る二つの轍もて	7
両の方より 駆らるるがゆえ。	8
(ぬばたまの) 夜の家を離りきて	9
日の乙女子ら 吾に伴せむと 面紗	9-8-10
頭より手もてはねのけ	10
光の方へ 急ぐとき。	8

〔注〕

- (1) *Die Fragmente der Vorsokratiker*. Griechisch und deutsch von H. Diels. 11 Aufl. Berlin 1964. Band 1, S. 230. ここでは原文解釈の問題に立ち入らないで Kranz の訳を付しておく。
- (2) Owen, G. E. L., Eleatic Questions, *Classical Quarterly* 54 (1960) p. 84ff.
- (3) Mourelatos, Alexander, *The Route of Parmenides—A Study of Word, Image and Argument in the Fragments*. Princeton 1970 chapt-I, p. 34
- (4) Fränkel, Hermann, (1)<sup>1</sup>, *Parmenidesstudien*, *Nachrichten Ges. Wiss.* Göttingen, Phil.-hist. Kl. 1930, S. 153 ff.  
 -(1)<sup>2</sup>, *Parmenidesstudien in: Wege und Formen frühgriechischen Denkens—Literarische und philosophiegeschichtliche Studien* 157 ff., München 1955.; S. 158 ff.
- (5) Fränkel, ebd.
- (6) Tarán Leonardo, *Parmenides, A text with translation, commentary and critical essays*, Princeton 1965. pp. 30—31
- (7) Bormann, K. *Parmenides. Untersuchungen zu den Fragmenten*, Hamburg 1971. S. 62
- (8) A. a. O, S. 64
- (9) Diels, Hermann, (1), *Parmenides, Lehrgedicht—griechisch und deutsch*, Berlin, 1987.
- (10) Cornford, F. M., *Plato and Parmenides*, London, 1939 (rept. 1950).  
 Cornford, F. M., *Principium Sapientiae: the origins of Greek philosophical thought*.
- (11) Morrison, J. S., 'Parmenides and Er', *JHS*, 1955, pp. 59—68.
- (12) Guthrie, W. K. G., *A History of Greek Philosophy*, Bd. II iff., Cambridge 1965.
- (13) Burkert, Walter, *Weisheit und Wissenschaft, Studien zu Pythagoras, Philolaos und Platon*, Nürnberg 1962.
- (14) Cornford, F. M., *Principium Sapientiae*, p. 118ff.
- (15) Cornford, F. M., *From Religion to Philosophy. A study in the Origins of Western Speculation*. 1912.  
 邦訳：廣川洋一訳『宗教から哲学へ—西歐的思索の起源の研究』, 東海大学出版会
- (16) Morrison, J. S., A. a. O.
- (17) Burkert, Warter, *Weisheit und Wissenschaft, Studien zu Pythagoras, Philolaos und Platon*, Nürnberg 1962. *Lore and Science in Ancient Pythagor-*

- eanism*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1972. pp. 283—5; (17') Guthrie, *HGPh.* p. 11.
- (18) Eliade, M. *Shamanism: Archaic Techniques of Ecstasy*. English ed. revised. London, 1964.
- (19) Dodds, E. R. *The Greeks and Irrational*. California Univ. Press, 1951.  
は例外的なものである。
- (20) Hes. *Theog.* 28.
- (21) Hölscher, U., *Parmenides, Vom Wesen des Seienden, Die Fragmente*, griechisch und deutsch, Suhr-Kamp, 1969. S. 72—73
- (22) Fränkel, H. *WF.* S. 161.
- (23) *VS.* I. S. 228
- (24) Diels, *Lehrgedicht*.
- (25) Fränkel, A. a. O.
- (26) Tarán, A. a. O.
- (27) Kirk, G. S. and Raven, J. E., *The Presocratic Philosophers*. A critical history with a selection of texts, Cambridge 1962.
- (28) Bormann, A. a. O.
- (29) Mansfeld, Jaap, *Die Offenbarung des Parmenides und die menschliche Welt*, Assen 1964.
- (30) A. a. O., S. 231
- (31) Fränkel, A. a. O., S. 159
- (32) Tarán, A. a. O., p. 9
- (33) Tarán によれば, *θυμός* が詩人のそれであることは, イ) 馬どもが道を知っていることは確か (V. 4) であるが, 同じことは詩人についてもあてはまる (V. 3).  
そしてこのことは, 詩人と馬どもがすでに何度も, 同じこの道を旅したことがある, という事実による。(V. 3) *εἰδότεα φῶτα*; V. 4 *πολύφραστοι ἵπποι*; V. 1 *ἐκάνοι* (反復的希求法). p. 30  
なお Wilamowitz-Moellendorf, Ulrich von, *Lesefrüchte, Hermes* 34 (1899) S. 203 ff をも参照。
- (34) Fränkel. ebd.
- (35) Kranz, S. *VS.* ebd.
- (36) Fränkel, *WF.*, ebd.
- (37) Verdenius, Willem Jacob, *Parmenides—Some Comments on his Poem*, Groningen 1942.
- (38) Deichgräber, Karl, *Parmenides' Auffahrt zur Göttin des Rechts, Akademie der Wiss. u. d. Lit.* in Mainz 1958, S. 633 ff.

- (39) Tarán, p. 10
- (40) Bormann, S. 57
- (41) Mansfeld, S. 229
- (42) Guthrie, p. 7
- (43) Kranz, VS, S. 228
- (44) Wilamowitz, S. 204
- (45) Stein, H., Die Fragmente des Parmenides, *περὶ φύσεως*, *Symbola Philo-  
gorum Bonnensium*, Lipsiae 1863/67, S. 765 ff.
- (46) Fränkel, A. a. O.
- (47) C. M. Bowra, The Proem of Parmenides. *Class. Philol.* 32, 1937, S. 97—  
112.
- (48) Mansfeld, A. a. O. S. 225
- (49) Kranz, A. a. O.
- (50) Fr. I. V. 27.
- (51) Kranz Walther, Über Aufbau und Bedeutung des Parmenideischen Ge-  
dichtes, *Sitzber. Preuss. Ak. Wiss.* 1916, 1158 ff.
- (52) Eduard Schwyzer, *Griechische Grammatik*, München, Band II S. 476-477
- (53) Kranz, VS. ebd.
- (54) Fränkel, A. a. O. S. 160
- (55) Mansfeld, A. a. O. S. 227
- (56) Hölscher, A. a. O. S. 49
- (57) Mansfeld, A. a. O. ebd. Vgl. Hölscher, A. a. O. „Da.” これでもよい。
- (58) Mansfeld, A. a. O. S. 229
- (59) Diels, *Lehrgedicht*.
- (60) Fränkel, A. a. O.
- (61) Bowra, Proem., p. 43—4
- (62) Vos, H. 'Die Bahnen von Nacht und Tag', *Memosyne*, 1963, S. 18—34.  
「上方へ」を除き、これが正解である。
- (63) Mansfeld, A. a. O. S. 238.
- (64) Schwyzer, Band II. S. 649
- (65) S. V. 24—25.

(1983. 9. 12 受理)